慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和二十五年秋期京都奈良方面見學旅行記
Sub Title	
Author	麻布, 弘海(Azabu, Kokai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.152(592)- 153(593)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鄙びた風景も一つの收穫と云へよう。

さて一時間程電車にゆられ、午前十一時半頃かなり激しく雨の降る川越市に到着、直に徒歩にて小仙波の喜多院へ。

喜多院に着くや早速麥湯の接待を受けて中食を摂る。

當寺の濫觴は淳和天皇の天長七年慈覚大師圓仁下向して一宇を建て無量壽寺と號すと傳へ、其後兵火に遇うこと一再ならず永らく衰微してゐたが僧正天海が止住したために大いに復興せられたことは周知の通りである。

今日は折悪しく住職鹽入亮忠氏不在のため、前執事木川道晃氏の案内にて見學を始める。

有名な土佐光興の職人繪屛風は上野の博物館に寄託中で見ることができなかつたが、その他の寺の寶をいろ／＼見せてもらつた。

現存の客殿は寛永の火災後、將軍家光が江戸城内の紅葉山の別殿を移して再建せしめた建物で、家光の誕生の間といふのがあり、狩野探幽の襖繪なども殘つている。

兩大師の横に經藏あり和活字版一切經六千三百二十卷、宋版一切經五千四十四卷がある。

慈眼大師廟では天海の木像を見、堂後の尊海の墓にも詣でたが東照宮の家康甲冑の像は遂に見るを得なかつた。

以上一通りの見學を終へ小雨降る仙波の森を抜けて中院に向う。

中院はもと無量壽寺に屬していたが今では獨立している。

中院では住職以下の接待を受け、古過去帳及び口宣案、令旨以下の古文書を見せてもらい、これに就いて伊木先生より詳しい説明があつた。此等古文書中には當院中興の僧正廣海關係のものが多くあつた。

一時間餘りにわたる見學を終へ、夕方五時頃梅雨に煙る仙波の靈地を後に今日一日の思ひ出を語りつゝ歸京した。

（雨宮 泰 記）

昭和二十五年秋期京都奈良方面
見學旅行記

秋期見學旅行の地を京都奈良地方に選び昭和廿五年十月廿日夜八時卅分發急行にて竹田先生を始め學生十數名京都へ向ふ。

廿一日「晴」早朝京都着旅館で休息の後京都大學考古學研究室を訪問、日本、支那、朝鮮の珍品人骨刀銅器錢土器美身具等史學研究上重要な參考品の見學を終へ、修學院離宮の廣大な美しき庭園を見學の後町に出て自由行動をとることゝした。或は東山の山莊銀閣、嵐山方面に市内見學に、或は加茂の河畔に夜來の疲れを慰するもあつたであろう。

廿二日「晴」九時頃本派本願寺を訪れ先輩井上明海氏の案内にて鴻之間虎の間、狹屋裝束間飛雲閣等を見學した。井上氏の特別のおはからひで飛雲閣三層摘星樓に登ることを得た。

飛雲閣は書院造りで天正年間に秀吉が京都に造つた聚樂第の一部を元和元年又は寛永九年に移した。摘星樓は東北の各壁面に一種の軍配形窓、西壁には窓や小窓を設け天井は一平面の鏡天井、床柱は榕樹といわれる珍木が用ひられてゐる。

阿彌陀堂參拜後、待眞室で茶菓子を頂き、十一時頃御所へ、御所は安政二年に再建され最近は疎開の爲見るべきものはなく、東庭紫宸殿淸涼殿等を他の學校の生徒と共に拜觀した戰後始めての時代祭(平安神宮)も人で埋まつてゐたが、烏丸二條邊で見ることが出來た。ついで靜かなる橫町を通り大急ぎで桂離宮へ向つた。夕やみ迫る頃バスにて歸館。

廿三日「曇」北野行電車で二條城へ、先輩二條城事務所長西村文雄氏と西洋史御出身の大島巳之助氏の案内にて天守閣跡二ノ丸御殿特別に桂御殿を見學することが出來た。

二條城は三四六年前德川氏が京都に於ける宿館として築造したものである。西村氏の紹介により二條陣屋見學、何處からでも逃げられる樣に出來てゐる獨特の家屋構造は甚だ興味があつた。

歸り道、景古の庭園池神泉苑を通り正午頃島原の角屋へ塾の先輩中川德右衞門氏を訪れ繪フスマ繪等を觀察し茶菓の接待を受け晝食後木津川の奔流に沿うて奈良へ辿りついて日吉館に入つた。

廿四日「曇」先輩安澤君と共に八時頃近鐵にて室生口大野へ、バスにて卅分室生寺に着く。室生寺は山の中腹にある眞言宗の名刹で特種な伽藍配置である。金堂內の藥師如來像が笑ひを含んだ溫顏樂しみの思出に耽ける樣な面差、光澤のある膚、兩乳の仄かな隆起さへも偲ばれる上軀、彫刻法も穩やかで自然らしさを加へてゐて私達に一番印象づけられた。夕方にやつと歸る事が出來た。

廿五日「晴」九時頃出發西ノ京驛を降りると松林の間に藥師寺の塔が見え秋空に浮び上つてゐる、松林が有り古の平城京の跡であろう、この唐招提寺は天平末期寶字三年鑑眞が聖武天皇の御冥福を祈りつゝ草創したと寺傳は傳へてゐる。伽藍配置は整然たるもので圓柱の立ち並んだ金堂平城京の朝集殿を移建したものと傳へられる講堂金堂は奈良朝の金堂形式、鳥佛師の釋迦三尊藥師如來像が代表的な作。私達は唐招提寺を後にして藥師寺を訪れた。荒廢した北大門を過ぎ境內に入る。皇太子殿下が來られるといふので直ぐに金堂に入つて藥師如來と脇侍の日光月光兩菩薩を拜した。藥師如來は白鳳期の作此の寺は天武天皇の勅願寺である。

塔は修理中であつた。一同は正午頃宿に歸り解散。天氣良好にして多くの美術品等を鑑賞する機會を得、今後の研究に實に有意義な見學であつた。終りに先輩の方々が終始快く御援助下された事に對して厚く御禮申し上げる次第である。　(麻布弘海記)